# Cynthia Voigt 著 *Homecoming* にみる家族・家庭観
## ＜両親に見捨てられた四人の子供達の家庭崩壊とその再構築を通して＞

稲　田　依　久

# An Analysis of a Concept of Family Presented in *Homecoming* by Cynthia Voigt

Iku Inada

**抄　　録**

従来の血縁が契機となる家族が築く家庭の崩壊が問題となっている現在、家族の新たなありかたの可能性を、成員の関係の客観視と家庭の機能の多様化にみている *Homecoming* の物語を通して論じる。

**キーワード**：児童文学、家族、家庭

（1999年９月19日　受理）

**Abstract**

In this age of broken homes, *Homecoming* presents some possibilities of creating new family. Cynthia Voigt suggests that we see our family members objectively and that functions of family be varied.

**Key words**: children's literature, family, home

(Received September 19, 1999)

Cynthia Voigt 著 *Homecoming* は、*Dicey's Song*、*Sons from Afar* と続く Tillerman 家の四兄弟姉妹を主人公とした物語の第一作として1981年に出版された。*Homecoming* は家庭喪失と再構築の物語である。アメリカ合衆国マサチューセッツ州ケープ・コッドのプロビンスタウンに未婚の母親と共に住んでいた四人の子供達、ダイシー、ジェイムズ、メイベス、サミー、がコネチカット州のプクイットの町で母親に捨てられる。その後、四人は困難な旅を経て母親の故郷であるメリーランド州クリスフィールドに住んでいる祖母のもとにたどり着く。が、やっとめぐり会った祖母はその頑なな性格から、また子供達に去られ、ことに娘である四人の子供達の母親との昔の確執から、また更には寡婦となった現在の経済的状況から、すぐには子供達を受け入れようとはしない。しかしダイシーは、祖母のもとで弟妹達と一緒に生活することが彼らが「家族」である証と信じて、努力し、祖母と戦う。結果、祖母も孫達と暮らすことが彼女にとっての新たな「家庭」であることに思い至ることになり、五人が新しい家族として生活を始めることにするという物語である。

*Homecoming* で扱われている家族は従来の定義に鑑みると変則的である。未婚の母と四人の子供達からなる家族が母親の失踪から子供達だけとなり、彼等が最終的に頼って行って共同生活を営むのは母親の母である一人暮らしの老寡婦である祖母というものである。この設定が呈示するものは現代の家族のあり方の多様性であると同時に家庭の意味の再認識である。*Homecoming* が最終的に呈する家庭は、母親を介して結びついている四人の子供達と彼等の母方の祖母にとって、定住・安全・法的権利・経済的安定といった生活保障が約束されるであろう生活の場、である。しかし *Homecoming* が描き出す家庭が意味するところの重点は生活保障にあるのではなく、また血縁そのものにあるのでもなく、それらが契機となって孫達と祖母がそれぞれに自己実現の場として新たな共同生活を選んだという選択にある。これは家庭が担うべき一側面を考察する上で意義深い呈示である。

本稿では *Homecoming* で四人の子供達が営むに至った祖母との共同生活の意味するところを長女ダイシーの家庭・家族観の推移を通して論じる。

## I

まずダイシーの家族・家庭の状況を概観する。ダイシーは未婚の両親の間の四人の子供達のなかで最年長の13歳になる長女である。父親が逐電した六年前の状況を、またそれ以前の両親の様子を記憶している唯一の子供である。ダイシーの記憶のなかでの幸せな両親は「二人だけの時には時々歌を歌った」、「陽気な時は母さんを抱き上げてぐるぐる回った」、「ある時は母さんに真っ赤なセーターを買ってあげてキスをした」(p. 39) 程度の記憶しかない。二人は「ひどい喧嘩をした」(p. 39) うえ「父親の友人がよく家を訪れ、その度に母親はダイシー、ジェイムズ、メイベスを海岸に連れだしていた」(p. 39) という。そのような父親ではあるが、ダイシーを「大切な娘」(p. 39) と呼んで「肩車してくれた」(p. 39)。また子供達のためにベッドを手作り (p. 40) してもくれた。父親は「大きな声で笑う」、「背の高い、濃い色の髪とはしばみ色の目」(p. 39) の男性で、ダイシーとジェイムズの細長い頭の格好は父親似である (p. 39) という。その父親は「車の知識が豊富」で「夏

の間はバーテンダーをしていた」(p. 39) が、母親が末子のサミーを妊娠したことで父親が怒って家を出ていった (p. 39) というのである。しかしその後、警官二人が父親の行方を訊ねに家に来たことから、父親の逐電には彼がなにか法に触れるような事をしたからではないかとダイシーは考えている (p. 39)。これ以降、母親と四人の子供達の生活が始まるのである。

六年にわたる母子家庭の生活ぶりはつまびらかにされていない。が徒歩の旅の間に子供達が思い出す母親との生活の様子は以下のようなものである。借家は小屋のようで (p. 24) 訪ねてくる人もなく、家族は世間とは没交渉の生活 (p. 38) をしていて、人々から見捨てられるようにできている (p. 38)。父親が失踪した後に誕生したサミーにとって、母親は心にかけて (p. 34) 愛情を注いでくれた (p. 38) が父親など存在しなかった (p. 40) し欲しいとも思わない (P. 40)。未婚のままに四人の子供をもうけた母親は子供達の父親の話しをしたことがなく (p. 38)、子供達は母方の名前、ティラーマン、を名乗り、父親の名前がフランシス・ベリカーであることも知らぬままに生活していた (ダイシーが父親の名前を知るのは母親が失踪した後のカズン・ユーニスの家でのことである (p. 138))。父親の失踪についてはジェイムズの述べるところによれば、母親は心ここにあらずといった様子でぼおっとしていて人をいらいらさせるところがあったので父親が母親を捨てた気持ちが分からないでもない (p. 39) と客観的に推察する。ジェイムズとサミーは母親が未婚であること、メイベスの知的発達が年齢相応でないことで級友から虐められていた (p. 41) のだが、母親を上記のように客観視していたジェイムズは、これは遺伝的に家系に流れる狂気のせいではないかと思っている (p. 12)。母親の異常に関しては、ダイシーも夜逃げをしてプリシラ大伯母の家に行くことになる少し前から母親は六歳の末子サミーと同程度の知力しかないかのようであり (p. 7)、忘れっぽくなり、出かけてもどこに行ってきたかも分からない様子であった (p. 7) ことを察知している。その母親は歌をよく歌ったようで ("Peggy–O"p. 23, p. 45, p. 126, "the cherry that has no stone" p. 28, "I know an old lady who swallowed a fly" p. 37, p. 214, "The water is wide, I cannot get o'er" p. 81, "Green sleeves" p. 103)、四人の子供達にとって母親はそれらの歌と結びついて記憶されている。徒歩の旅の間に所持金が底をついてもう何をしたらいいのか分からなくなり、子供達の世話をするのにも耐えられなくなったダイシーは母親もこのように感じて失踪したのだろうかと思い至る (p. 76) のだが、これは後に母親の従姉妹にあたるカズン・ユーニスの家で警官に母親の捜索を依頼した時にダイシーが母親の失踪の理由を「お金がなくなってどうしたらいいのか分からなくなり、私達のことを忘れてしまった。私達のことを心配するあまりに私達のことも頭から消し去ってしまった。」と説明することにつながる (p. 129)。四人の子供達は、母親が彼女の父親、子供達の祖父、について話すのを聞いたことがなく (p. 83)、また子供達は祖母がいることすら考えたこともなく (p. 114)、母親は自分の家族について話すこともなかった (p. 137) という断絶ぶりであった。母親との五人の生活の社会的な側面に関しては、近隣の人達との疎遠に加えて日曜日に教会に行ったことがなく (p. 120)、どの宗派にも属していない (p. 128)、ティラーマン一族は慈悲など受け

ないと母親が言っており、社会福祉や失業手当も受け取っていなかったし相談にも行かなかった（p. 129)。しかしダイシーは母親と一緒にプロビンスタウンに住んでいた時は幸福だった（p. 138)、四人にはいい母親がいる（p. 148）と明言する。

以上のように四人の子供達の母親との生活は、通常の尺度からは決して恵まれたものではなかったが、少なくとも母親という保護者を有しての家庭生活であり、定住して学校に通い、貧しくとも親子の絆を確信しているものであった。しかしながらそれまで住んでいた家を家賃滞納から夜逃げして捨て、更にその逃避行が始まったばかりの当日に母親が失踪したことから、四人の子供達は、親、家という家庭を形成する大きな要素を失ってしまうことになる。それでも母親が頼ろうとしていたプリシラ大伯母が死去していたことからその娘であるカズン・ユーニスの家に滞在させてもらって母親の出現を待っている間は、母親との再会によるかつてのような母親との家庭回復の希望があった。がカズン・ユーニスの家に滞在中に失踪した母親がマサチューセッツで緊張性分裂病を病んで植物人間状態で入院していることが判明する（p. 158）と共に、それまで四人の子供達が辛うじて持ち続けていた希望が打ち砕かれてしまうのである。精神を病みつつあった未婚の母親との母子家庭で、経済的にも社会的にも恵まれていたとは思えないものではあったが、母親の愛情を確信して幸福だった家庭生活、また失踪した母親と再会しての家庭回復の希望が、肝心の母親の人間的能力の喪失によって失われてしまったことで、母親との家庭生活は完全に過去のものとなってしまうのである。

母親の失踪以降この決定的家庭喪失に至るまでの四人の子供達には、母親と再会できるという希望があった。精神を病んで尋常ではない母親ではあっても、そして夜逃げをしたその日の朝に子供達をショッピングセンターの駐車場に故意に置き去りにして（p. 9）失踪した母親ではあっても、母親として子供達を愛した事実が四人の子供達に家庭への希望を抱かせていたのである。その希望が辛うじて存続する間、すなわち母親の失踪以後プリシラ大伯母の家に到着するまで、長子のダイシーは家族という集団としての自分達の存在を存続すべく、三人の弟妹に関する全責任を負って徒歩の旅をする。子供ばかり四人の旅の間中、ダイシーの家族観を支えていたのは「四人が一緒にいること」(p. 28, p. 56, p. 60)で、ダイシーは母親のように失踪したりしないで面倒をみてくれるという弟妹達の信頼にこたえること（p. 39)、「他の誰も信用しない」(p. 62）という排他的かつ求心的なものであった。加えてメイベスが言う「母さんが一緒だったらいいのに」(p. 37）という思いが家庭回復の希望としてあった。しかし現実主義的なダイシーは母親の精神状態が尋常ではなかったこと、また駐車場で子供達を置き去りにしたのは母親の意図的な行為であったことを察知しており、母親喪失、家庭喪失という最悪の事態を密かに想定していた。それ故に徒歩の旅はダイシーにとって現実的な困難—僅かな所持金、その日の食事と安全に眠れる場所の確保、警察に保護されて四人の兄弟姉妹が別々の施設に収容される危険性—に加えて心中の葛藤—母親に再会して五人で以前のような家庭生活を営みたいという期待と、同時にその期待は実現しないに違いないという不安—を抱いての二重の苦難であった。がダイシーがその不安を有していたが故に彼女の家庭認識は変化、深化するのである。

## II

母親の失踪後、祖母の家に行くまでのダイシーの家庭・家族観は以下のようなものである。ダイシーにとっての家庭は、当初は母親を中心としての五人家族が生活する場であった。夜逃げをしたのもプリシラ伯母を頼って行くことで五人が新たに一緒に住むことが可能になることを想定してのことであった。しかし母親の失踪でそれまで思い描いてきた家庭を支える要を失ったダイシーは家庭について考えざるをえなくなる。ここに家庭認識に関わる第一の変化が生じる。それまでは社会的、経済的に恵まれなくとも母親がいることだけで家庭・世帯と一般に呼ぶところの社会的集団を形成することができていた。が保護者がいない子供だけで徒歩の旅をしている間に「社会はお金持ちの大人のもの」(p. 61)、「世間は子供に敵対している」(p. 61)、「子供は両親のもので何らの法的権利も有していない」(p. 62)、「子供にはお金が稼げない」(p. 75)、と社会に於ける子供の立場の厳しさを知るにつけ施設に収容されずに四人の子供だけで家庭を営むことの不可能さを思い知るのである。即ち家庭とは成人した大人のみが形成できる社会的集団であるということを知るのである。ダイシーの家庭認識の変化の第二点は徒歩の旅の11日目、前夜の野宿場所であった墓地での朝食後、ある墓石に刻まれた墓碑銘に目をとめた時に生じたといえる。そこには "Home is the hunter, home from the hill, and the sailor home from the sea" (p. 85) とあり、これを解釈して、ダイシーは「死が家庭であるかのようだ」(p. 85)、「死ななければ本当に家庭で安らぐことができないなんてなんてひどい話だ」(p. 85) と思いながらも「ほかのどこにも行きたくないと思わせるところが家庭だとするなら、家庭などかつてなかった」(P. 85) と思い、また徒歩の旅で厳しい現実を体験しているダイシーは「死んではじめて休息できる」(p. 85) と納得する。そしてダイシーは自分自身を、墓碑銘にあったように、死んではじめて安らぐことができる「狩人、船乗り」(p. 86) と認識するのである。即ちダイシーは、かつて母親と暮らしていた時にも両親が揃っていて社会的、経済的な不安の無い普通の子供が感じていたような家庭の幸せを味わったことがないという事実をふまえたうえで、家庭における安らぎ、休息などは彼女が生きている間には望めないのではないかという悲観的予想を抱くのである。このことが彼女の第三の家庭認識、正確には家族意識と呼ぶべきものであるが、を強くすることにつながっている。「母さんみたいに行ってしまわないでね」(p. 8) とメイベスがダイシーに頼み、ダイシーは「四人一緒にいるのよ」(p. 28) と弟妹に呼びかけ、ジェイムズは「ダイシーは僕達をおいていかないよね」(p. 38) と確認し、「ジェイムズが回復するまで (旅をつづけるのを) 待とう」(p. 58) とダイシーが決意し、「施設にいれられるかもしれないし、離ればなれになるかもしれない。警察に相談する危険は冒したくなかった」(p. 96) とウインディに説明する時、四人の兄弟姉妹は決して離ればなれにならないことを決意し確認しているのである。加えてダイシーのこの決意を支持する発言を、ダイシーが彼から受けた親切に感謝し尊敬すらするようになったスチュワートがしている。「四人が一緒にいること、それが大切だ。・・・そうできなくなるかもしれないけれど」(p. 108) と彼はダイシーに助言する。唯一の保護者であった母

親に捨てられてしまったダイシー自身および彼女の三人の弟妹にはかつてのような家庭生活が望めないのであるなら、子供達を愛してくれた母親とその母親との幸せだった生活の記憶を共有し、母親の姓を名乗る血のつながった兄弟姉妹が一緒に暮らすことでせめて四人が家族であることを確認し続けたいというダイシーの生き方への間接的承認をスチュワートが与えたのである。兄弟姉妹が一緒に暮らすことは父親を知らず、母親もなくし、母親の家族と会ったこともないまま没交渉である自分達の血族のアイデンティティの拠り所であると同時に他者、社会に対して結束して自分達の存在を主張し守る防護壁として四人に残された唯一の方法であったと思われる。

以上のようなダイシーの家庭・家族観は、死去していた大伯母プリシラの娘、即ち母親の従姉妹であるカズン・ユーニスの家に滞在するようになって一層強化されることになる。上記第一点および第二点に関しては、カズン・ユーニスの家にいるダイシー達は、「私達はまたいとこなんだわ」(p. 114)、「私達は家族よね」(p. 119) というユーニスの言葉にも関わらず、彼女の家族ではなく「お客」(p. 117) であり、彼等のために出費がかさむ (p. 135) ことから家事を手伝ったり、いい子であることでカズン・ユーニスを喜ばせなければならず、そのうえカズン・ユーニスに「憐れまれている」(p. 116) が故に居心地のいいものではなかった。即ちカズン・ユーニスの家は彼女が自分自身のために営む家庭であって四人の子供達の家庭ではないのである。加えて上記第三点に関しても、カズン・ユーニスは子供達の母親が回復の見込みのない病気で入院していると知ると、ダイシーの考える生活、即ち四人の兄弟姉妹が一ヶ所で一緒に暮らすこと (p. 115, p. 121, p. 122)、そしてそうできるのならダイシーが働くようになってから生活にかかった費用をカズン・ユーニスに返そうとも考えていた (p. 115)、そのダイシーの希望を第一義にせず、カズン・ユーニス自身にとって都合のいいやりかた、即ちダイシーとメイベスは自分の手許に、ジェイムズは僧院の学校に、サミーは養子に出すこと、を選ぼうとしていた。(p. 147–p. 148) ここに至ってダイシーは家庭について最終的見解を得る。ダイシーは家庭を決定的に喪失したという実感である。それは家庭に関しての「白昼夢など信じない」(p. 150) という現実感覚であり、「家庭は母さんがいてこそだというのに、母さんは入院していて回復の見込がない。私達にはもう家庭がない。どこでもいい、いられる所にいよう」(p. 167) という決意である。更には「もう家庭など望まない。自分達が自分達らしくいられて、自分達にとっていいと思えることができる所にいられればいい」(p. 168) という達観である。この認識を得たダイシーは彼女の考える家族生活の最後の可能性を求めて、実の姉にも好かれたことがない (p. 120)、見ず知らずの、変わり者 (p. 136–p. 139, p. 241) という評判の祖母のもとに出発するのである。祖母との生活はダイシーにとっては家庭に対する期待や幻想が打ち砕かれたところから始まるのである。それ故ダイシーが祖母との生活に期待したものは、四人の兄弟姉妹がその日の暮らしの心配をすることなく一緒に、そしてできればそれぞれの本来の性格や特徴を他者の誤解によって歪められることなく発揮して、生活できる一定の場所のみであった。ここに至ってダイシーにとって家庭は完全に過去のものとなり、未来においても期待できないものとなる。彼女に残されたのは三人の弟妹だけであり、

彼等四人がティラーマンという母親の一族の名を持つ兄弟姉妹であるという関係を存続させることでしか社会に於ける自分達のアイデンティティを保つことができないという状況に陥っていたのである。しかしカズン・ユーニスの家を出て祖母の家に向かう四人は、ジェイムズの言によれば、「これまでは僕らはいつも捨てられる側だった。でも今度は僕らが出ていくんだ」(p. 168) とあるように、何の希望も見込もないままではあるが、それまでとは異なり、ダイシーが自ら決意し選んだ未来への道を歩み出すのであり、このことが彼等にとっては思いがけなくも新しい家族・家庭生活を構築させる原動力となるのである。

## Ⅲ

ダイシーが家庭への幻想を捨てたにも関わらず、彼女が最終的に新しい家庭を得て新たな家庭観を抱くに至るには祖母との葛藤を経なければならなかった。失意のなかで四人の兄弟姉妹が同じ場所で暮らせる事だけを望んで訪ねていった祖母はダイシー達よりも更に惨めな状況にあった。彼等の祖母はかつて家族と住んでいた家は所有していたが、家族を喪失して孤独だったのである。祖母アビゲイルは六十歳 (p. 119) で、十二歳年上の実の姉にも好かれたことがない (p. 120)、変わり者 (p. 136–p. 139, p. 241) であり、クリスフィールドの町から7マイルの小さな農場 (p. 242) で四年少し前 (p. 248) に夫ジョンを亡くした後はひとりで住んでおり、近所つき合いはなく、長男はカリフォルニアにいるらしいが二十年も音沙汰がない、次男はベトナム戦争で戦死 (p. 137)、その下の娘がダイシー達の母親で二十一歳の時に商船の船乗りであったダイシー達の父親と駆け落ちし (p. 138) それ以降は音信不通だったというのである。祖母の孤独が拠るところは、彼女の夫が厳格で、あまりにも厳しすぎたのか、または無慈悲だったのか、子供達には鞭をふるって言うことを聞かせ、いつも思い通りに事を運び、怒りに満ちていた (pp. 138–9) うえ、彼女は夫のいいなりで自分の考えを言うことはなかった (pp. 138–9) ことから長男、長女に去られたことである。更に夫の死後は電話もひかぬまま、外の世界とは没交渉で暮らしている (p. 139)。不幸な結婚生活 (p. 138) の結果、祖母は人間不信に陥っており、怒りに満ちていて (p. 245) 他者を素直に受け入れることができない (p. 245, p. 249)。農場も家も手入れが行き届いていないので、住人である祖母の心同様、荒廃していた (p. 244, p. 254)。祖母は人間不信、人間嫌いに陥って他者への怒り (p. 297) から心を開こうとしなかったのである。このような祖母と対面したダイシーは、祖母と家庭を築くことを期待していたのではなく、ただ四人の兄弟姉妹が一緒に暮らせる最後の可能性が残された場としてこの祖母の家に置いてもらうことだけを切望していたのである。

この祖母との出会いは拒絶との戦いであり、辛辣な言葉の裏に隠された真実を探る探究の日々である。ダイシー達がやって来ることをカズン・ユーニスからの手紙で知っていながら訪ねてきたダイシーに対して居留守をつかおうとしたり、見知らぬふりをして「敷地に無断侵入している」(p. 245)、「泥棒でないという保証はない」(p. 246) として追い払おうとする。が言葉とは裏腹に昼食を馳走 (p. 247) する。そしてダイシーが孫であることを

知っていると告げる。(p. 249) またここまでの道のりの間、どこに泊まったかを尋ね、ダイシーが旅をしているので滞在する場所など必要無いと答えると、「私もあなたの家族の一人だ」、「ここに皆で泊ればいい」(p. 250) と答える。ダイシーが弟妹には優しくしてやってほしいと頼むと、「そんな約束はできない」(p. 251) と言いながらも港で待っている三人を船で迎えに行く労をとる (p. 251)。このように孫達を孫と認めず、なにかにつけ優しい感情を素直に表現できずに心と裏腹のことを言ってつれない言動とる祖母の心を開いて一緒に住めるようになるために、ダイシー達はスイカズラの藪を刈ったり、掃除をしたり納屋を修繕したりして何かの役に立とうと努力する (p. 267–p. 292)。この間にダイシーは祖母が話をしてもらいたがっていること (p. 263)、娘であるダイシーたちの母親が子供達を愛していたことが祖母の心を動かしたこと (p. 265)、スイカズラの藪を刈ることを祖母が喜んでいること (p. 270)、サミーの子供らしい行動に祖母が思わず声をたてて笑う様子 (p. 273)、祖母がダイシー達を身寄りのない孤児ではないと言明すること (p. 275)、メイベスが腕をいためた時に祖母が手当てをする様子 (p. 278–280)、サミーを微笑して眺める祖母 (p. 279)、それまでは本人に向かって「知恵遅れではないのか」(p. 264) と言ったことがある祖母がメイベスは知的障害ではないと認めるに至ったこと (p. 294)、ダイシー達と過ごした六日間に自分自身を客観的にみつめなおす祖母 (p. 297)、ダイシーの意志の強さを認める祖母 (p. 297) を見続ける。

その結果、ダイシーは祖母に対する人間的理解を深め、「いい敵だからいい友達になれる」(p. 280) と歩み寄り、祖母を美しい (p. 284) と評価する。その気持ちが祖母に通じたかのように祖母は、夫の子供達に対する理不尽な仕打ちを夫への忠誠から黙認したことが自分の子供達をまた自分自身をも不幸にしたこと (p. 295)、さらにはその不幸な母親を見捨てまいとして家にとどまっていた娘であるところのダイシー達の母親ライザを引き留めることもせず、家を出て行かせたことを深く反省してもいること (p. 295)、それ故に夫の死後は自らを偽ることなく生きようとするが故に社会と隔絶した孤独な生活をしてきたこと (p. 295) をダイシーに率直に語るのである。このように祖母が自己疎外ゆえに苦悩してきたことをダイシーは知って祖母への理解を深め (p. 295)、加えて強い意志、闘う姿勢をダイシーが祖母から受け継いでいるが故に祖母とダイシーとは殊更強い結びつきがあることをダイシーは悟り (p. 296)、そのような祖母が好き (p. 298) になる。一方祖母はダイシーの弟妹への愛情に心を動かされ、初めて人間として解放されるに至り、四人の兄弟姉妹を孫と認めるのである。そして祖母がダイシー達に、突然いなくなってはいけない (p. 299) と言うのを聞いて、ダイシーは互いを受け入れることができたと確信するのである。このようにダイシーと祖母とが愛情と理解を互いに抱けるようになった背後には、二人にとって、そしてジェイムズ、メイベス、サミーと祖母にとって、母親であり娘であることで共通の家族であるライザへの愛情を共有していること (p. 295–p. 297) がそれぞれを結びつけていることをも同時に確信するのである。

ここに至ってのダイシーの家族観には母親失踪後の徒歩旅行中と基本的に変化はない。即ちダイシー達四人の兄弟姉妹が愛し愛された母親ライザを通して属するティラーマンと

いう一家の血縁であるが故につながる人間の集団をダイシーは家族と認識しているのである。それ故にそれまでの四人の兄弟姉妹に加えて祖母アビゲイルもまたティラーマンであるが故に、即ち彼等の母親ライザの母であるが故に、ダイシーの家族なのである。ティラーマンという名は彼等が存在していることを自分自身にまた社会的に主張する唯一の証明であり、その名には彼等の存在のアイデンティティとしての血族とその歴史があるからである。一方ダイシーの家庭観には大きな変化が生じていた。死ななければ安らぎや休息を得る家庭は手に入らない、母親のいない家庭などありえない、家庭など望まないとまで思っていたダイシーが、新しい意味での家庭を希求するようになったのである。ダイシーにとっての新しい家庭とは単に滞在する場所ではなく、上記のような家族観を具現する機会としての祖母と「共に生活する機会」(p. 312) である。それを彼等四人に与えるようにと積極的に祖母に求めるのである。こうなるには一つには祖母が四人をカズン・ユーニスの家に再び戻すことを、これはダイシーが望まぬ事であったのであるが、考えていたことが作用している。カズン・ユーニスの家では四人の子供達が一緒にいることは叶わず、また自分達らしくいることも叶わないことは既に明らかだったからである。もう一つには祖母とダイシーがそれぞれにとっての娘でありまた母親であるライザへの愛情故に互いを理解しえたと確信した三日後、カズン・ユーニスの家に再び戻るまでの間通うべき学校へと四人の子供達を祖母は連れて行った時に、祖母がメイベスを一個の人格として扱い、メイベスに現実と闘う勇気を持つようにと薦めた (p. 307) 事実が作用している。ダイシーは祖母がメイベスを理解し、愛し、大切に思っていることを確信したのである。もう一つには母親のライザ同様に社会福祉の恩恵を蒙ることを拒絶して夫の遺産だけで生活している祖母の経済的負担を軽くするための方法としてジェイムズがクリスマスツリーや鶏を育て、野菜をつくって売ることを薦め、ダイシーもお金を儲けることの大切さを言った時に、祖母が興味を示した (p. 304–p. 305) ことが作用している。四人の子供達の自己実現の機会としてであると同時に、それまでの自己疎外から解放されたことを明らかにした祖母アビゲイルが新たな人生を歩む契機として「共に生活する機会」としての家庭をダイシーは求めたのである。ここにダイシーは祖母をダイシー達四人にとっての運命共同体としての家族の一員と認めたのである。彼等五人はそれぞれに、また共に、自分達らしく生きたいと願っている同志なのである。それ故のダイシーのこの要求に対して祖母は「あなたはそれでいいの？」(p. 312) と配慮を示してダイシーの気持ちを確かめ、また祖母自身もかつての自分ではなく、ダイシー達と共に生活することを願うであろうこと (p. 312) を表明する。ダイシーが最終的に得た家庭観は、彼女の家族観が実現し存続する機会としての共同体が可能になる生き方であったのである。

## IV

以上のように変化したダイシーの家族・家庭観が呈示しているのは現代の家族・家庭が直面している問題、家族・家庭とは何かという問いかけ、に対する示唆、即ち家族・家庭の有機的ありかたの可能性の一つのである。現代における家族の定義として一般的なもの

は「夫婦関係を基礎にしてそこから親子関係、兄弟姉妹の関係を派生させる形で成立してくる親族関係者の集団」[1] があげられよう。消費経済のもと核家族化が進んだ現在ではとかく家族・家庭は親子という血縁が結びつける経済的集団とうけとられがちであるが、これは「感情融合を結合の紐帯としていること、ならびに成員の生活保障と福祉の追求を第一義の目標としていることにその基本的な特徴がある」[2] という特質の一側面が強調されたものと考えることができよう。しかもここに定義された家族はかつての制度としての家、家族ではなく、「友愛的家族」[3] とよばれるところの家族の成員「相互の情愛、信頼によって結ばれる」[4] 関係である。しかしながら現在ではこれらの本来的、自然的家族がそのままで健全な家族であり続けることが困難となり、感情融合のうしなわれた形骸化した家族、「思い込みで暮らす幻想家族」[5]、家庭内暴力や成員の家出で家庭崩壊した家族が増加し、一方では離婚、再婚、未婚の親と子供達、養子縁組みによる親子といった一般的な定義では包括できないさまざまな家族も増加している。このように現状ではかつての血縁、親族関係によるだけでは健全な家族を構成しきれないという事実が露呈し、また血縁、親族関係だけでは家族を十分に定義しきれなくなってきている。

それでは家族を家族たらしめる要素として血縁に加えて何を必須とするべきかを考える時に、ダイシーの到達した家族・家庭観が一つの示唆を呈している。ダイシーの場合は血縁の象徴は縦のつながりとしては母親であり、また横のつながりとしては三人の弟妹であった。この限りにおいては自然発生的家族の範囲にとどまっている。そして母親を介してさらに縦のつながりが延長されて祖母に到達するのであるが、ここには単なる自然発生的家族を超えた要素が含まれている。その第一は自己実現という人生に対する実存的欲求である。しかも自らの自己実現のみならず、三人の弟妹の、またそれまで疎遠であった祖母という、いずれも血族ではあっても存在としては他者の、自己実現をも可能にする生き方を選んだという選択である。これは現代の家族の特徴としての「家族が家族自体よりもそれを構成する個人を優位において新たな自己組織化を行おうとしている」[6] ところに通じるありかたといえる。が単に自分自身のための自己組織化を目的としていない点に注目したい。これはスーザン・ソンタグが社会的存在としての人間のありかたを論じて、「人間社会はだれかの役に立つという利他主義が軸になって成立している。自分を超えたある規範のために、人は何事かをするのです。他者という概念は暗黙のうちにあって、信義や誠実、高潔さなどの形で現れてくるが、これらは時代遅れのように考えられている。」[7] と述べているところに通じるものである。即ち自分自身が十全に生きることを望んだ時に、その自己実現への欲求と真摯さが同時に他者の自己実現にもむけられているという、自己実現の普遍的価値を体現している点である。こうするためには生きることの意味を、何が大切であるかを、普遍的な価値・真理に照らして自分に問うて意識して生きるという基本的な生き方を、血縁ゆえにそのままで関係が存続し続ける家族に対してもとりうる客観性を愛情に加えて持つ必要があろう。

ダイシー達が自然発生的親子家族を超える家族を形成するに至った要素の第二は家族の成員に生産活動を課したことである。家族が生活する場が家庭であるとして、家庭は核家

族化がすすむにつれ「家族は次第に感情本位の生活の場面になった。・・・現代の家族は、・・・仕事集団としての性格を失ってしまった。」[8] と小比木啓吾がその欠落を指摘している家庭の旧来の機能である。もとよりダイシーは休息し安らぐ場としての家庭を求めたのではない。生活するとは経済的な行為であるというダイシーの的確な現実認識が、四人の兄弟姉妹をして祖母との生活を経済面から支えることを自分達自身の問題とさせたのである。ここには感情集団としての家族、休息の場としての家庭には見出しにくい目的達成の為の役割や協力、責任、仕事集団を維持するための規範が生じる筈である。しかしそれらはかつてのような制度化され強制されての家庭内労働ではない。必要性を自覚したうえでの自発的社会的行為である。ここで社会的とよぶのは、家族という小集団内に於けると同時に家族以外の対他・対外的関係という二面を含んでのことである。この仕事集団としての内外への社会性の意識がダイシー達兄弟姉妹と祖母の家庭内での存在と位置付け、関係を自ずからつくりあげることは想像に難くない。生産という活動を通して家族内に求心的に向かう関心そのものであると同時に家族外へと発展、発信する運動体としての家庭が呈示されているのであり、これは現代の家族が欠いている集団存在としてのダイナミズムを取り戻させる契機になりうるものであるかもしれない。以上のような可能性を感じさせて五人の物語は次作 *Dicey's Song* へと続くのであるが、ダイシーにこのような家族・家庭観を抱かせるに至った祖母との相克がダイシーと祖母両者に与えた影響の意義の解明を次の課題としたい。

**注**

1　石川実　「現代家族の社会学」p.4
2　同上　p.4
3　同上　p.68
4　同上　p.68
5　小比木啓吾　「家庭のない家族の時代」
6　石川実　「現代家族の社会学」p.18
7　朝日新聞　1999年6月14日　夕刊
8　小比木啓吾　「家庭のない家族の時代」p.36–p.37
9　同上　p.245

**参考文献**

石川実 「現代家族の社会学」 有斐閣ブックス　東京　1997
小比木啓吾　「家庭のない家族の時代」 ちくま文庫　東京　1995
Voigt, Cynthia. *Homecoming.* New York: Atheneum, 1983

## ＜梗概＞

同居していた内縁の夫に去られた後、未婚の母親ライザ・ティラーマンはマサチューセッツ州ケイプコッドのプロビンスタウンの借家で四人の子供達を六年間にわたって独りで育てるが、生活を維持するのは困難であり、その重圧が精神に影響を及ぼし始めていた。更に失業して経済的に行き詰まり家賃も払えず、また第三子のメイベスの知的発達が年令相応でないことで再三学校からの呼び出しをうけていたことが既に精神的に限界を迎えていたライザに更なる打撃を与え、現実に対処する意欲を失わせる。(後に分かるのであるが、ライザは緊張型分裂病を発病してしまう。)六月初めのある未明、ライザは親類のなかで唯一クリスマスカードのやりとりのある母方の伯母プリシラ・ローガンを頼ることにして子供達を車に乗せて夜逃げをして、コネチカット州ブリッジポートに向けて出発する。

出発後、数時間たってコネチカット州にはいったすぐのプクイットという町の駐車場に車をとめたライザは、ダイシーの言うことをきくようにと子供達に言いおいて、失踪してしまう。戻ってこない母親を待って車の中で一夜を過ごした四人の子供達は、母親が行く先と決めた大伯母の家に自力で行くことにする。が、前夜の夕食の出費のために所持金は11ドル50セントのみであり、それとてもかつて持ったことがないほどの大金ではあったが、ブリッジポートまでのバス代には足りず、地図一つを頼りに徒歩で行くことになる。

保護者のいない子供である自分達が警察に保護されて別れ別れになることを恐れながら野宿をし、食料の調達に苦労しながらも親切な人達に助けられて二週間あまりも歩いてやっと大伯母の家に辿り着く。しかし大伯母は数カ月前に既に亡くなっており、その娘ユーニスが一人暮しをしていた。八月までの二ヶ月たらずを尼僧になりたいという希望をもっているユーニスの世話になる。その間に母親のライザが分裂病を発病してボストンで保護され、植物人間状態でマサチューセッツ州の州立病院にしていることを知る。また四人にとっての祖母アビゲイル、母親の母、がメリーランド州クリスフィールドで一人暮しをしていることも知る。尼僧になることを諦めて四人の子供達の世話をしようと決意したユーニスの世話になり続けることも考えないではなかったダイシーではあるが、ユーニスが長女のダイシーと第三子のメイベスの二人の姉妹は一緒に暮らしてもいいが第二子のジェイムズは僧院の学校に、末子のサミーは養子にだすことを考えていると知って、祖母のもとで四人が一緒に暮らすことはできないかと考える。母親の車の処分代金57ドルを手にし、加えて窓磨きのアルバイトをして合計150ドルを貯めたダイシーはまずは単身で祖母に会って可能性を見極めようとする。

がその計画を察知したジェイムズは、三人に内緒で祖母の住むクリスフィールドにでかけようとするダイシーをつかまえて四人一緒に祖母のもとへ行くことになる。そこで四人はまた旅に出、農夫の意地悪やサーカス一座の団長の親切を体験しながら一週間あまりで祖母の家に到着する。が、祖母はその生来の頑な性格と結婚生活の間の抑圧、自分の子供達との不仲、ことに子供達の母親である娘との過去の確執からすぐには子供達を孫として受け入れようとはしない。なんとか祖母の家に置いてもらおうと、子供達は家事を手伝い、

家周りの整備をし、互いに理解しあえるように努力を続ける。その間に祖母は四人の孫達に血縁の絆を、ことにダイシーには自分自身との類似を、見いだす。そして半月あまりが過ぎ、祖母の心が開かれて四人は晴れて母親の故郷、母親が育った家で、孫として祖母と共に、家族として暮らすことになる。